

証空の『観経』ならびに『観経疏』の解釈を中心とした安心の捉え方は、上述のとおりである。すなわち、これで私は救われるのだという仏の真実を領解する心が三心となって、そこに自然と阿弥陀仏を中心とした行が展開されるという思想であると受け取ることができる。この証空の思想で最も問題になるのは、われわれ凡夫がいつ領解できるのか、領解したあと心が退くことはないのかということであろう。また領解したかどうかは、その行すなわち念仏が自然となされるかどうかでわかると考えるのであろう。

証空は法語類も豊富に残している。前述の『観経』の解釈は三福諸善の問題について大きく取り上げられているが、法語類では『白念仏御法語』（森英純編『西山上人短篇鈔物集』文英堂、昭和五十五年、二三九頁）に見られるように念仏のみが強調される。これはまた行としての念仏の実践の心構えを説いているためでもあるが、『女院御書』下巻に興味深い言葉が見出される。それは念仏をしていても三心ということを知らず心細く思えるということに答えて、三心は「信ずれば自然に具するもの」（『同書』一二二六頁）「往生のこゝろざしふかく念仏申さば、自然に三心具足のものにて候」（『同書』一二二七頁）というように、ある心を前提として行ずることによって三心が完全となると言っているのである。見かけ上は行具の三心と同様な表現となっているが、これは願行具足の念仏を意識し、行具の三心とまた趣を異にした

表現と見ることが出来る。このように法語類では、すでに念仏を行じている人についてその心の在り方を説いているものが多く、逆に念仏を行じるきっかけが説かれていない。

念仏を行じるきっかけについて法然は選擇によつて信の確立を説いたが、証空は領解によつて信の確立を目指したものと見えよう。領解とは『觀經』に触れることであり、仏の願を信じていることであり、また往生を願うことであるということが出来る。これによつて信を確立したあとは、自然と念仏の生活に入るのである。

## 第四章

### 法然門下の 安心論の同異

#### ● 第二節 安心と起行の関係

安心そのものの概念については、証空が仏教行者の心、法然、聖光は念仏行者の心と位置付けているが、いずれの諸師も安心という言葉より三心をそれぞれの著作に多用し、それを安心の内容としていることは共通している。すなわちこれら門下の間での共通の認識として浄土宗行者の心あるいは往生の正因としての心として三心があるのである。